羣書類従

三百二

和書門
類 九五九五 號
二〇四 函
六七〇 冊
架

内閣文庫
和書 類
九五九五 號
六七〇 冊
二一四 函
一八 架

内閣文庫
番號 和 9595
冊數 670 (380)
函號 214 39

国立公文書館
National Archives of Japan

群書類従巻第三百二

和歌部百五十七　雑二十二

撿挍保己一集

三五記　鷺本

夫人ハ賢愚あるとかしこき地ハ稀にして愚なるハおほかるものなり
優劣あるときもまたかくのことし詠哥ハ少くまさるハ清旡なりされハ
むかしも古風をもちて今をもたくむ所のみを学ひて宗匠のならひとい
へともそのさまを分ちてかへしく趣ハ数々一もなし
きみかくらはんかたにのかしてさすかにみえとも又ことは
則はまたふかきものなるかも代をかさねつゝ

予こゝろみに是を俗語とあらため當代の旧
規とも思ハされハ儒道ハいふまてもなく人の寳に同し
文章代々の家業ハさしもすたれし事なれハ枕
仏とさためすしてさへ人まねのことくして稽古
やもすれハ物うし役者も其域に出たらぬ
しかくて道なきまゝ家ハ絶るか如し
悲む哉儒宗の後生ハ三賢の昔の跡ある捨
てさへ見さる哉無学士の業ハ其仏
の詞也
我…

尋めるよく言葉をちとく…の枯たるそう
ち孫の庵…ハ耳に残る故實なく眼に
ふつゝか旧草もなきして井蛙の漫海の波を見
野鶏の虚空を行へ筏思ハさるに及ひ
ちとひきまるあてわくなる事を中よ
をあまくして脩理なく作もして文明の
人ハいつとなくあへて雌雄ともへ
予七歳の昔亡父卿に随ひ清涼殿に作
しるとのの月ハさしめなくもと叡慮のよとゑと
いふ地感動の歌作りし以降七旬に及まて

寝食をわすれ病席にいそんたしなからも家
にはさのみもたえすとか駟隙の二日の長途に及しかとも
荒乃是とも書さむためしには叶ふさるへきとて夜に
ちかき婦か住吉北清神の玉の御光のさやかなる夏の
夜の事感してたゝかく明月のかゝる秋のうち
よるよも二帖の抄物とあつめて愚老か庵にあつ
めし侍るなるへし時に建保五年八月中旬に是と

書篇了

寺一幽斎躰

侘めの道ハ酒とそ二ある身にハなる身をも書てもち年へぬる是とかな

おもひの夜こしもなかりける水のあともみえぬさとに侘そよそしもあや
なきのはかなくこゝろつましよりゆく月をのみなかめむしの八月

槐花雨潤新秋地　桐葉風涼欲夜天

扁舟蘆暗穐風泊　旅店紫疎暁月扁（偏イ）

鷰子楼中霜月夜　秋来只為一人長

行雲躰

きえぬるよもひとへにかたの風に誘ふおもひそよそしかすかなる
袖のうへに誰かへ月ハ忍ふる袂とよふかもしても人のとへいし
夢さらに孫さかハ秋のむかしまても人そのみかへりてねかひきと

蘭省花時錦帳下　廬山雨夜草庵中

夕殿螢飛思悄然　秋燈挑盡未能眠

生涯事去只如水　老後人來獨見山

廻雪郷

風さけハよそにみなるこの世にもおもひ思ひなけきをよせかけるものハ
おもひいらぬ物そよ心の月ハかくまてみえしハそれにつけ花山院の
忘れし人ゆへ事をも思ひよせ六ゆへにも思ひをよせ其事たえたれ

行宮見月傷心色　夜雨聞猿断腸声

遅々鐘漏初長夜　耿々星河欲曙天

何時最是思君処　月入斜窓暁寺鐘

かやうに書きて父作る新花姿思ひ作るへきと申せし也

今の郷ハ幽玄なとハ思しても其花の詞かきあらはしたりさらに
拾玉の廻雪廻雪の面影なとも聞へし幽玄の中にも猶情
ある体の思ある風をかしや幽玄ハ越稀なる也雪ハ別名あり
る風也不論幽玄といへるも詞の中にもいまた遠捨花飛雪
の月と思ひなるとも思ひ飛雪花風をいとよなけき
のなかにして公詞の花のたとへとも思ひやり何とも行雲
雪の郷なとは風にも思ひて亡父ハかくれし先にも遅の
姿とや申されしも見なして和歌の本になるへしとて神仏
の時も思はし捨し郷なりと是非ハ云々は風をさしく物
やさしかるらしもちんと思ひ物よに一風ある事ともやらん詩

たゝ波も年のせて侍るハあまたある程なれとも今諸乃
流としく聊白侍らむと披見せしまうし物見合せく分侍
詩歌とつくり添えとおさく侍る紀さて也かくのことくある
よみ出せ侍らんしけふもわかる婦しとしく頭きて花咲
ハとの流し詩をも乎朗詠集の文をゑらむ事もなあんとき
まおそれとて

其二長言賦

初せとよみし人のまたあるなりけれハ定まよ月をさるやけき
よそにのミさしてやこたへかへりさやれる海の山を秋の白雲
うきよの秋をまあらし我夢さとをちる海さ紀のかへるさの山

三五夜中新月色　二千里外故人心
野花不分充寐力　酣歌一曲太平人
孤鶴飲皐秋雨冷　臥龍在水暮雲低

高山賦

吹とふあらしにたちの高根よりこれをとして月やいつる
ふりこへ雲居の存はるつくし月ハなかへてかへふにさまよふ
世をそむく山のみあとにハ松風も昔の夜や残さむあるらん
老梳愁鬢天山雪　眠論浮世澗水泡
六十餘廻看不飽　多生定作愛花人
暮年容鬢随陀冷　秋日頭陀道路涼

望白鷗

こゝろをつくし明方の雲間より永代の月は彩色のごとく
墨の入乃里はあまりにとまりて人の心さへもと山かけの風
佩人はあるかなきかは宿かりし行まは月のもとは海そし

庭松百尺歴年老　山月幾廻仍舊圓

去國三年孤劔月　歸程万里片帆風

枌楡影舊寒山底　皷笛聲喧落日前

澄海鷗

更手ゝに十分の世のかきとせともまそるゝに月ハかゝ崛ときなる
なくよすかゝつゝハ涓とよふをさる若は無ととにかるふまの風

君も無ハとてまふし極とは川乃まれハく田は秋の初風

巫陽有月猿三叫　高嶺無雲雁一行

水蔽螢荒衰老婦　霜蓬鬢冷散班翁

佛像新容山月満　法皇遺跡岸苔留

洲鷗を生けの口むさなしてハよまれぬをかゝへなるを
白高山荒海宿は鷗皆中ハ只長高鷗はかちに明我のもとかゝし
ある海しかるへし洲中にも遠白鷗ハ黒色の秋をしし
ふりたる和に絶よるへき姿あたりてけに長き鷗もとなよ
らん人を初ひより讀ともくるしからし歩かとぬかまた
ふ附ハあるかたかな節よかゝんかされ

第三有心躰

波のあはれ藻汲の袖ハ荻なれや花の枯葉に風そよくなる

あはれなる江の松ハおもひ寄る帰る跡もなき浪とや同じ

明石のうら遠なき人の袖をとふよもすがら月ハかなしき

今日不知誰計會　春風春水一時来

華開日暮笙歌斷　遥望微雲洞裏飯

北曳馬肥春草短　南賓雁痩晩嵐長

物哀躰

花さそふいざ家路をわすれぬ鶯もおもふ人の来ぬかたの

かなしさとてもこのさとにたづねても来しゆくへしら山のみね

小篠原風まつ露の消やらでこのひとふしをおもひおくかな

故園桃李看無盡　情在舊遊不在春

貞女淚盡難接跡　望夫石下欲苔蹤

短詞不及秋山趣　長樂久傳古寺名

不明躰

墨染のたもとも花世の花盛りされてもおもひて名か

かへるさの朝霞とふたとへも今や海士の藻塩火の

誰か住む山のおく見えぬ宮古はひとよあさくれ

歌酒家々花所々　莫空官領上陽春

一樽酒盡青山暮　千里書廻碧樹秋

莫言飲酔迷帰路　只有清谿月送人

至極躰

日暮れハ行かふ人もなし海士の住ちる谷の嵐の音ハかりして

山里ハよるさへもいとゝひぬるとの跡たえて谷の嵐すさまし

嵯峨野山ちよの古道跡とめて又ほのくらき月の駒

不酔黔井争得去　庭囲山月正蒼々

姑蘇台上煙花月　寧賞春風簫鼓声

残塘去五三千里　一道風光但看

埋世躰

山寺の行ひの鐘の声さへにふかくもくれぬとやまた悲しき

なかめつへハ文この時志ありまほしくそ今世を今ハあはれをき

檻ほとの山路のほとりにぬれまさりてあはれさをおもふ深きのそて

誰言春色従東至　露暖南枝花始開

城柳宮槐漫揺落　秋悲不至貴人心

霊台莫咲微禽志　雲路再登一瞬恩

撫民躰

物おもふ袖よりつゆやなりぬらん秋風吹ハ身へぬとものとや

寿かへり花ハ年にありて花の陰ふかゆく身ハとても哀とあはれ

春雨のあまねき恵みの地ハ御代とたのむ草木のもとのふかき

三巴暁路同残月　万里帰心驚塞鴻

宴席愁追延久跡　詞花猶異昔風情
寵禄形息朝露底　山林哀亮夕陽中
此の詩も海南に帰の嬉なく絶へさは宗杣より
仏をふかくよまむともへさ事まで先哲もなためつる
道ハ文よりかろ仏をほへ玉ふ智仏のへし仏のよまれさる
とよまんりしと仏法者のもハ退居して我道穴さて何は
もようぬ帰のことハ海るこ之を退ハようやしくすり世よと
亡父卿志みくしきひとこ元有心躰とてなて玉極をまへきと
えりて理世撫民乃玉極躰大旨ハ有心躰の中お治之おおけ
し有心躰とも見ゆる海とおもへつのまう仏ふさるおとく

なけゆる撫よ仏とふかくようこともへそそうむ類を理世撫民お躰
ことをへし実ゆる事をとてとこ海ゆる撫は讃さるとも
それとハ此心躰は撫して理世の為訣とハ申へる得有心躰ハ
あまりて躰あるへしたとへハ呉越乃堯舜萬朝乃延喜天暦
なとく此の賢王とも如く詠の躰まかれ理世撫民躰
とかく此上の玉極ともへしかさこそしたく申るハ世道
まて躰くりゆまへさるへさまや

事四葉躰

ほのほのと明石乃浦の朝霧に島かくれゆく舟をしそおもふ
おもへてたゝ君か代を松山…年をへて…

思ひかね妹かりゆけハ冬の夜の河風さむミ千鳥鳴なり

長堤纎草河邊緑　近郭新篁竹裏啼

一夢山島曙雲外　万點水螢秋草中

玉輪低月中天曉　金鐸拒風上界秋

存也躰

夕されハ門田の稲葉をとつれてあしのまろやに秋かせそ吹

君か代ハつきしとそ思ふ神風やみもすそ川のすまむ限ハ

挟筵に衣かたしき今宵もや我をまつらん宇治のはし姫

有琴有酒閑中楽　無執無憂世上情

十八公榮霜後露　一千年色雪中深

氷封水面聞無浪　雪點林頭見有花

花葉躰

鶉なく真野の入江の濱風におはな波よる秋の夕くれ

あらし吹真葛か原になく鹿ハうらみてのミや妻を恋らん

忘るなよ程ハ雲井になりぬとも空行月のめくりあふまて

西樓月落花間曲　中殿燈殘竹裏音

浮栄胡槿露花邊　餘命蒼林風葉紅

臥聞簷滴斷猶續　坐見窓灯消又明

松躰

みよしのハ山もかすミて白雪のふりにし里に春ハ来にけり

住吉の松を秋風吹からに声うちそふる奥津しら波
むかし此うたは其八十よ年一とせにあたるといへる今年やいかん
因時穿落三分滅　萬物蹉跎過半凋
四禅年積縄床舊　三昧秋涼玉磬寒
暁淡苔深樵一叫　暮林花落鳥先啼
竹躰
夕月夜しほみちくらし難波江の芦の若葉をこゆるしら波
いまそとし孫むまれし松と時雨つゝ二葉もこゝろ千とせ月日をかも
ちかく君がつかへさきたる波のあやしやとまる神にかゝる
長生殿裏春秋富　不老門前日月遅
班女閨中秋扇色　楚王台上夜琴声
望瘦雲嶺千條雪　跡入煙村一道霞
此躰又すゑも孫とよろしくあるへし松躰竹躰とは松躰と云八
とかく然るに入て松としてなしさるまてに待く松躰とおもへる
いつもめてたきをせさるやうに物にかゝれてよりくる
うたのさまもかへれ見ともなくかれ竹躰八
松躰にそふへきものとも申すめりもとのうしさくへきうた
心のこぬまて待へし幽玄躰なと猶かへて後世躰
めてたくへしとおもふ中をかくれ見えて
右五事可然躰

おほかたの秋のねさめの長き夜も君をこそいのれ身を思ふとて
いろかはらぬ年の暮ながら若菜つみし春ハ
限あるものをはなちて可愛をしてあをなる池の八重咲
柳無気力條先動　池有波文氷尽開
蛍火乱飛秋已近　辰星早没夜初長
不是花中偏愛菊　此花開尽更無花
秀逸躰
一
むさしのやゆけども秋のはてぞなき　いかなる風の末にふくらむ
さびしさはその色としもなかりけり　まきたつ山の秋の夕暮
明ぬ文あまへこと山のはちかきまでやどりゆく月のよそにふきはらふ雲
青山有雪諳松性　碧落無雲称鶴心
秋水漲来船去速　夜雲収尽月行遅
孤舟棹影穿煙去　暁寺鐘声渡水来
抜群躰
一
年をへし宇治の橋もりこととはん幾世になりぬ水上
住わびて身をかくすべき山里にあまり隈なき夜半の月かな
月残る村雨晴行雲のうへに思ひすてたる人
臥見新図臨水障　行吟古集納涼詩
観身岸額離根草　論命江辺不繋船
范蠡長男凡未老　韋賢少子一叢残

寫古辞

秋の道ハ稲葉は風のさとさとも山田のおとにまかせてこそ候
暮ゆく色ハいつれも秋にて同しからす道ハたのしみなるゝの音につきけるか
浦の嵐世にかはりの橋より水のみたりし心の花の末世にまかうとさゝやく
門碑消盡路無字　堂舎傾危瓦有松
往昔興亡都似夢　舊遊零落半歸泉
蝸牛角上争何事　石火光中寄此身
此辞又おもしろき事なれハむかしよりもいまに似事ふ絃辞のかたち
に設定逃技群の辞の姿ハ初心の者もしらしふへからさると
おもしろくへしとも心をとゝめへき様をまなひ給へし

絃歴かさなりてかたちもかはりハ自然に心よまかりて此人に絃
しられてあへし。寫古の絃是かならす事可絃辞といふ
ことの城郭より學ひて毎しう是ハおもしろきいまて如風
情たのしみなるゝにゆかしさそふらふや

東六面白辞

山里にて抛世いとなみもなく寄りくるし者かくとも
うかひたる人あるとそ我を此山のおくにまかせけし心たにかハいのちにかゝる花
いよいよ線ヶ置と宮の杉此行末おもしろきと世に無かりけり
著為京洛勢名客　今作江湖潦倒翁
暮煙蕭々雲断處　一行寒雁是吾郷

双涙餘揮巾上雨　二毛多被鏡中霜

一興躰

山里ハものさひしき所なりやこ人さへ訪ハゝ住かひもなし

庭の雪に我あとつけて出つるをとはれにけりと人や見るらん

今まては風の霞の枝にさしあまる後ハ西秋の風

有山有水兜率地　非醉非醒鶴髪人

沈淪無氷唯愁涙　漁樵非山是宦途

江縣風生波嚙岸　疎林花落雪満科

景曲躰

冬よ川面との折ふし神無月ハ木の葉の後より行へき也

人ならて風のみしけきあさちふに乱るゝ萩の花そちりしく

つゆときえやおしき志賀の都のあとにしけるまゝなる花の山桜のみそ残

山帯斜陽松影落　水啣乱石谷聲餘

春花秋月不如此　金谷南楼其任他

煙霞遠近應同戸　桃李浅深似勧盃

此躰ハさしも大事なる躰之されとも達者なる

てたき読手ハ地ならしやもし上手のよそへんすれた

めさしくまて末続の筆ハさしてむけにもおもはゆる事也

西しらんやこそ讀へきなりと

第七濃躰

ちらさぬよしみつゝ之葉をかりまくもなかりぬへき神のまにまに
おかのとよめ秋のよそのやとにもおはしけれは山もとも月やましらん
志らくはまたおほえすしかもなれしかは山路をなにゝかはせん
竹籬蒼茶青無紫　萩浦秋都白不黄
苑下横琴調夜月　船中載酒酌春波
随嵐落葉遮飛鳥　抱石竹根似臥虬
此躰をいはゝ猶よく秋の時とよむ様なるへきもやと
けれは猶あさやかに口にうかふるやうに心あらし
おもしろきをもなほさりにかなしみにも猶あるか
へしとやらん

第八見様躰

村雨に風まよひておもかけの葉にちりしも秋の夕暮
さそふ紅葉の色ある山ふかみ夕村雨にあらしてや庭もしらん
猶ふかきほとの色は紫葉なりまきにてうつるのやゝさかり月をみる
風生竹夜窓間臥　月照松時臺上行
新河柳色千株暗　古園雲帆萬里皈
城上寒山紅片々　村雨岸水緑消々
此躰をはよくおもひてよみなれぬれはやすらかにまか
よし此姿のなかにも見所にも猶心のこるへからす文
にもさもにもかなふへき様なるとて是をも此躰とや

勝宗のさして公廳にまいらぬ時ハ京の氣分を
くみ絶えもせぬ事請たる事連樣を訓しおもん
そらぬくまとやらんをよせとまし いろく業もせよと
しもかくる鉢の家とてもはも口五首も讀つまし八
必氣なちくまへしとて後己かまての鉢ば
よろこともかえけり

第九首一節鉢

之まへの冬来て見え松はやとし海はまや浩まあ蘇
夜まもこころ袖をも欺きちかふ見しかの獅の人して八
君いまなる月まへもまかふあ露まむまあ守まの方は夕毫の花

秋風一箸鱸魚膾　張翰揺頭喚不足
湖上青山今欲買　白雲無主向誰人
殷帝夢中求夜雪　周文車右載秋霜
此辭をハ如さく不可好常にいましもなる絶好士若
そのそうしるとむ家柄たる必文雅よしとすハあるもと
附くハよむへし自然によ渦れん時共事なると
無と求よむへからととも添重しけまもなくさえ
もとねやうまとも候まも

第十挫鬼辭

ぬ連で用と云くしのも此家の事は流あるてる先鍛世へめぐるん

袖ぬれしや、もとの海萩野なる旅寝やとまりあかつき涙
おもふ心はよせめて孫なきの末まてこゝろのまゝ忘れかたきの心

三巴峡月雲収白　七里灘波葉落紅

恩賜御衣今在此　捧持毎日拝餘香

但他四皓辞雲色　唯我一人吟浪声

隨力辨

あまたの人とさらに問ひて波と風くらきといふ事も一かたならぬと同し所の思ひ
いまもなほ何の此松原のくもり（と）もいひ残し千代までも待ち給ひしを
孫なきの人はなほいふもおもひかけて残る葉の末に柏もかはる

故郷有母秋風涙　旅館無人暮雨魂

路穿白浪湖天北　跡入青雲楚塞西

寒渓水咽長松老　秋寺人稀落葉深

此詩はいつの世とも見えぬかなしき其心を読みしとかや地さと
まことなるはまことにかたるもおもしろしといへるなり
行て見る俗にいふ心はさまさまなるにていはんし
くものきそよかしくてよまんとして秋の暮を入
あはれはあまたの深き心もたえぬ詞ものこりて
ありて自然にいはれる事の昔を思ひて餘情を
しりぬる類なる見識の中にあるもの今にまさ
作られたることはりの上にてまことに人のこと

まさりてぬもめでぬも色々のしくとてたやこ
よまれしくいともん狂にあそはさる歌をきゝとよみ
なりとへしされハおもふ人とき楷として亡父卿もさたまり
ときそく幽玄によろしきものとへてまゐりて杜甫をハ鬼甫に
おさなれしまやと道も家の古文として作る道ハ
我ハ古のものにかへるによちにも歌をめでたる事し
汝ハ杜甫をハえもいはぬとうかりとにはたちいゑと
よみえよとてゆるされとも西にも一切の態ハ法よ
まろんなとらて姿あるともとへときゝやと見え作道ハ拉鬼
甫をも家の中道とかへしやとて思ひもちわ作るに

なり給ひをとらへてよ他のくへなりる事し杜甫清然
まとしなとくしなわらせ作もとその中巻并
了不清きとそて蓮一家も頭の秋をとらへ
おなかにゆる後の人のへとさしとしてあらかの
見偏にうち息るきらえてよくろ他人とれとお
うちあるやしとそもこらなりの詩をさへなまつる極
他よらもし作りかハおをなるとも梅しきとたりき
あるゝ詩をハ故今吉大旨ハ用捨ありてまとなり
なま道ハさ徳てはしさなし他作りし照に詠あるを
ときこ詩家のあるもまはりをとなるよ後生の作あれ

ことに猶し侍るをみくらへ給はすなりとて流にう
函底の折柄とおもひてほのかに胡久吟して云
あら詠をうけ道すか給ひとまなふをとらへきよう
たるか面を求る實に見えより那さまにに賞せられまし
きりし此卦まて緣情者歌はよろちたかひて道に
所侍る必しも帰さきたる詠をも窺まかりして歌潭
にをよひ池底の玉をおもふ面々しくとてことくに那是
をもてよろしく好奏しもたをあまつ眼念をおもしむる
たらくもとくとたく業春日住吉の大神にもちつかをさ
申たてくまちかくかかく花を侍りておもとなくさるんや

一題をよく心得へき事
凡天象地儀植物動物をはしめて大方和哥の題の字にもとりて
ことあるはよしといひて三十一字の中に題の字をとりまはしてかなはすして
見るへしまとあらはし又物にそへてかはれるによりてまたみ
とくおもひ侍るへし詠めるとては古今の風流の遊
むねをとこたへ和歌の書にハいひくたせしめる
不堪ハ事たるのゆへに見くれ花時不居
然ともいふこともなし
門前拾遺宜嘲夏　國婦孤夢還婉春
あら道に影もある詠もとくみはもさうるにある

ことさらして何事に文落葉隔水と出る事也
くはしく申
能々よまれ事也ざん方に此題ハいかにも吹山の落葉を
又月照水と云事也
よむ人ハあまた池の岩などにおもはぬ月のうつるはしをも
此二首ともに吹の落葉のとも見えよくわかるとおもふ
題しらずとて題にいさゝか遠くとも苦しからず
心あるとさまよひ出つとて紅葉をわたる橋ハあ
是もしよまるべし題しらず五月宵歌合郭公
五月雨の頃のいそぐもよほしてこゝにあるとや聞えて鳴くや声
のこるらし

此の題ハ落葉をもつて根まで難しかるべき也
いかにも絵入に落とし来る三吉野の題をはなれ山
我まてさかのを見ることも山田かみかとしるを
雨まとひの中には落葉題とハさ西とおもふべし
隔朝遠鐘恋
松かぜにかねの音も絶々に聞えて百夜の間に九重に
思遠人恋
何方にもとまりて見る事我もふかく思ふ我身にも知
隔日来恋
二日月のよこれもあかつきの西風の有明まちかねのまつ

不来不逢恋
我恋ハ未来ぬ麻衣きてなれにし袖ハいつもかはらし　年
題の文字ハ二ツあれともいつれも一字なり
よそにてかくる事もあらねハ其の題をハよく心得
かねて心得てハいかにもまへをよく見て一首
まつへ題をよく見て心見題をよくわきまへて
まとへハよくよくわきまへて事も侍る雑題の心をハ
明字易にして難くしくよみかたきなり
池水半氷
池水半とハ池を二つに分て池の半ハ氷る水の心を読へし

雑字雑題にて候也
雑題とハいはゆる題に心をよせて読かたき事にて有ける
本題にて読候事も有之 風情なき
題をもとめられたる事とハ詫あるを以て詠すへき
一首の中に古集に秋なとゝいふ題をよみたる歌
ありてそのゆへにかゝるの心をさしてよみ侍る
又文字にかゝはらすしてよみ題をとをす
やうあるもの也読たると申し 仮令朝霞とあらん
あさかすみと詠し 野也をも雪の心を暁庵
をあけぬれは夕暮をも中にかよふて遠秋千鳥

をさくらともみなとよみてきこゆるハ、無下に事あさく
侍るへし。歌のさし次の字に朝の霞といふ事
をし兼日に至て亭題なとし次第にけさの霞と
無下に小河の霞におなしく朝かすみにおなしくまそ
侍るまし。ましてさかりの花をなしともあ
をもそへと讀まへ無月ハいふ事を次第に無し
雑歌にハかやうの事まてハかならすしもこさふらふ
無からむと歌をハ一首に清くしておはしまさんハ無
一首によみてし歌をも綺のみハからし　斟酌
あらんことにや　堀川院の百首の歌を一字題にても

侍るハさやうの事まてハ兼題の字にてもおなしく
よまんにハさし次の字に讀み侍れとも皆なし
かやうの事を一首二首なとよまんに讀みてそし
めてたき文字ありてよみていまた兼日ハ無念なる
至極なる歌なし兼題ハ考をも詠し　月の
歌に暁月をよむなと花をありなん無かるへき
羇中と旅宿とのなにかハかへし文歌にも出
来ぬ無きこその題にもいさなをといふ事に
ゆともなつかしうかやう無し　猶後ハ事風にまか
無きうちにもよろこひて一ほとよにきこゆ

可心得也もしくハ春の題にて秋のこゝろを
よミなとし秋の題にて春の景物を詠ミまし
かなとこそ遠さかるへし其の要なるへし

霞隔遠樹

霞ハ春秋の形見とたとへてよめる霞の衣に比して
なれハ歌ハ読合に雜ありて題々にかへて歌
にハ春ありて題なとも花なとの秋なとしいさ
さしもきえてなとハ雑歌なとも見えなし
對をとも題なとも遠なとなとしなとも
可し

春霧にてもこゝろハ雁の羽風なと取合せて題にも
郭公なとの月雨に橘田をも取合せ秋の字あるへし
是等にもあまたの題にあれハ取合せて泉水を題にそへ
新乃下てもとよむ人なかにハ河をも題にそへて
読人のなとも雑あ歌まし春興秋興いつれにも
出仕ける事をとそなくさんとの心をもとむへしと朗詠
の題にハ又これ仙の山居なと遠山なとハ山里
にハなとハ何にも詠ハ雑亭類の家なとの
野径類の事なとも海路舟の事なとも水郷
なとも更にハ何にも宇治浪吉野河近江河なと

うるはしく積おくしかるにまことにおもひハおほきなるを
事なるによりても叶ふ又大事なる也ことハ淡流に
なりてよみ侍る事待へられハ平生よき心清月行る
おほかた文なとにも名誉侍るむ題と云ひとにも只恋と
かくさまの廉なとも見ゆることよりこそ草紙にも古河まても
清くりも萩をも廉なく草にもよみてもなきむことをも恋
詠清やうに侍りける當城夏むしと詠せる妻ハ今は紀
まうてこる事なる也と云れも後撰に
八重葎はらはれる宿ハ夏むしの声よりほかにとふ人もなし
此歌ハ撰ともなくされハ秋せの夏むしとも

よみおきたる事に侍るとよむ歌から牡丹なとを草
紫苑などの名にて草紫なと酒か露との部にも
よろの物名異名なりてハかくのことく遠く聞えき
世恋のよろしきあまた侍るも國の名又と古今の名ある
井手の山ぶきなとしてもよろしき心地事よもある八
別儀なきの名を題なるとも字を寄せて心よくしても
古今よりこし文名所をも清く孫人のよまぬ事
つゞき侍るとかむ歌をよし名所をもうちよせ
こゝろのかなへるよき事あるを歌をよみぬる歌なと
なまじひ一切のくさを事をも古き紫に清くさしても母縁

ける事なれとも猶難儀秘事ありあるへきを持あり
かやうによむ事ハ先達の道といへり然ハさる事なれとも
さやうに好みさるへき事来りしよしおほえてをのつからよしと
にハ何事も魔障乃とかくおこる事もとよりおもしろし
出て誰もさまさま何地にもそふたのくさして又あまたある
事なれハ人みな経をもしもつて讃嘆なりとの
所をいふ作る歌也 又名所とも人々の心にまかせて
詠ぬとも其度に随ていくさしむかひてハ讃歌也
筑紫にて
深川とよめる也人の心をこそハ名にふかきをとふとのおもへる

鼓瀧にて
音にきく鼓の瀧をうちみれハ只山河のなかれなりけり
此の歌は西行法師の舎那事なりしにハ人々合点の氣
あらさまに読ぬへき也 さとりのほか秀歌なれとも猶
人々おもひいたす正體なき也 されハかの大方の題に
名所を出し人々案内はかりなりしかも人の心にまかせと
もさしてハ是を出しよりあなかちなるへき事と思ふ
秋くれハ紅葉とへさなからや花さらに山にも花とさ
ら露紅葉なり花とちらぬにも紅葉ともなり事也
人々いかにも露にのこらて歴覧せんに花も紅葉

もはらに京極殿にてもまひてよむへしとこそ申に
なき仙事など御所にも葉し侍らく題なりけり大淀の
浦にも今は松なし墨吉の岸にもかたちもなし
橋もなかなかにつくし題にも見えぬ題長柄
の橋なかりけるを見ゆるかしこくはなしと物つけ
よつ水無瀬川の流ても水なしとよむ題なき
なるもかく八申ともいまも又現在地事にも
いそ来らむしのあれたるかやうの事にはそもも
読みそにつきて題によみて柳ににほひも
かゝる心よむ事は侍る題し事にと何とかや

しる題にて作者一人のうちにて撰集にもいれも
入るまし事なる題し

歌を讀に用意有へき事

百首をよまんには地歌とて面白からぬ辯ぜの
いひしらぬよみさまはよんで千年にも逢て来
ぬ題に蒸題をよく葉と題しきのたまふ
たくみをそのみ論あるへきと又いふに辛労も数
やともさもこそ歌よみにも御しるしによ見るこそ
それつらし人のよむ地歌めく来る事八自然の
事なれと百首なとにかくも沈思もするにこそ

あるにも又絶えてまひし二十首廿首などは
哥無きよくぐらて此歌よりかはるれば作者の
身にとりてもはよろしく葉も合し歌合なとさ
た歌にも失譜なく人の難しはべりて來まを
かねてよろしく見合し合ともあるを撰ぶも
うたまし加へ來まらさらともよむ合しあきの
さきれつとしとらうをもとしとや
山櫻さく絶伸しよりも久かたの雲居にみゆる瀧の白糸
見渡せばあさの志つみなそてあら所あさる哥川のさと
何とし來ん野路の玉河とて絶えて色ある波に月宿るも

哥つ達は峯の桜の目の花て月はさらける天香久山
四季の歌は世やらのとしこれよむ合紀年や立や本は
天徳の哥合なり
あつまとも多き出やうに我恋は物や思ふと人のとふまて
根ざしもひまさし今も此身なれも思ひなれ外の名の
あまつ人愛するとも我らひとも達けるとうやけるも
一よ絶しさたくひみかの歌合の歌よ
郭公來なる此首世のかくはめつとも一絶にもし地と
此歌は百首など書地哥也とるとも古哥達歌なり
いふまへきさまねふもとも文ともおもす根葉あるそら絶

なき道はさうさうべし判者も能々可非しられども
哥ハさまて沙汰しかゝる類なり後拾遺に入事多う
のおもむきを能々得て讀侍べし
一哥其心もとむるの事
さる程に清る十體そのまゝいふハいとよくその哥此の
ときにひとつなるべし其道ハ遠さしく哥のよしさき
まにまにて其のいふ也の取様にて作り物にて
の用心なくして鶴本にくはしく中々もし花
かくの事いくらも此事を中々て文書にもえ
侍るべし其を業にて世々いふにくるしさよまき

おもかげにまさこそ門をむきと云ひしあるゆゑに申へし
きこえひとつ風情なれどもまつくはしく哉つまに一え
あるもれよりのなるべき枝末をあらそひよもあらん
まるまゝやさ様を業まるとも上句を下にはなし
下句を上におきてそをかやうに能くほとこるべし
よまとりふ六ハおもなし事もなれどもこまかに此ややうり
清くも也などを心と枝の人のとゝめくことさもこにも
一字二字まてをりくにあはせく二十一字なるる
三哥なるく哥ふる也まして句のまるかむを一句ま
しつとあるみにハいつかまを讀しくはえてある句毎

まことも左うるまし此の論たゝかりに成しゝかれとも
先人の申されける詩歌に依稀政厳の感しゝる
ましけれハ一字とも絶損しぬまゝ一句をみし
おなしうしみなひ一句ま誠たまゝ一首そのまゝうる
天ゆるとうや哥毛人ゝ一字も一句きとゝまゝのたと
染ちてよりぬきとりしと申尋ゝ一つゝ像の
八月十五夜ゝ御哥の侍しゝに近く作へと勅定ありき
しくよりて御前に侍りしに絶かたゝに仰をと
寄まいてゝ哥此まゝこのむかふのやらに讃仰せんと
また尋ねたる綸旨の古のきまゝ亡父卿申ゝ二事

いたく人ゝ哥ハ五千首餘の郷相の容顔ともゝまゝて
見絶やうとなる葬に束帯酒也と人ゝしゝくこさゝまゝそ
陣乃座にはさてし笏ともたせしまゝはゝつゝとふまゝて
せへらむいとうくあなちれまるやうになむあるまはし
こさ事ゝこゝ申されゝ人ゝのまゝハさりくハやまと絶たとふ
こ絶人ゝ今とくなる云ゝそ思れにハかなふへきとそ
のたそかの御哥はいてこさ時おなし御ゝまゝハ亡父
卿感歎申さ誠にあるともや思ふもやうにそ侍
る由ゝこゝまゝ申
ま誠に身ハ此ゝえへる庭哥と被ぶ事ハ始まゝとも思召ゝまゝすれ

其の哥ハさし然の文字なとの和するに級なしとおもひに
よる雛し魚の尾をは捨ておこに於てはいかなくある
豚のふ番をさしもなうてに待りしとまさ
吉野川さしの山吹は早く分る事をしやあらハせめて人
山人のむかしの河を流来てこそハむなしき鹿をとつて谷の色
箸鷹の身よりも羽翅をふりて人てた鏡をさへふり捨て場
いつれ遠きかと他哥とする他に待るてあの事よかしましき
風躰なるもなしの事於てハ哥のよきことのあるふに
かゝるてこそなをあるなるをかるこの句かく日まて
丹かむハあやしきなる

日も暮ぬ人もかへりぬ山里ハ嶺のあらしの音計して
日暮れハ遠く人もかへらぬ山里ハ嶺の嵐の音計して
おもくるを後頼朝の哥なる二条とふかさなるこそ
いまもなしゆかしきさうにしんかよく北哥をそ
よく拾遺にも今井待るとしかよきかまさ本なる
餘情に哥詠しなる造待るを
河舟のわれは浮てなハたてしくてのこ世をなをしや
此哥をあはれにとも達てあなかし哥仙達中の文なる
し地ぬれとも人の日本に待る歌ハ
又やミん交野のミのゝさくらかり花の雪ちる春の曙の

なき後は猶さも此事のかたらひてさびしく暮る夕まぐれ
鶉なく真野の入江に浜風そよぎおもしろきところ秋の夕暮
うかりける人をはつせの山おろしよはげしかれとは祈らぬものを
志賀の浦や又も来て見ん書写や打まねきまや波にあり
世中よ道こそなけれ思ひ入山の奥にも鹿ぞ鳴なる
さびしさは憂世にかへて忍ぶとも杖つくべき松の色かは
移り行雲に嵐の声すなりちるかまさ木の葛城の山
袖のうへに蓬生月ハやどるかとよそに見しかど人のうへかし
衣ハ夜ハさむしろに風さえて月をかたしく宇治の橋姫月
山姫のころもかたしく雲の衣手にかゝるかつらの玉かも

是等にてたかきうたのさまを心得べし俊成卿の詞に祐ハ又
一ふしまことはかりのそれハいふにおよばずしるべきもの也
歌をよむ時代かはりて今の事にはかなはず此ど
もおなじ大かたこの歌にさまを定めなきことなるまことに
よく読むべし歌にとりてハ寛平いまの歌をいふべく猿丸
とりくめもちかき代にも基俊俊頼顕輔清輔亡父
卿なとハむかしにもすぐれたるよみ人にてありけれとかやされど
たゞ人ぐの上手にて名誉もありしかハ誰もその人の
風躰をまなぶべきにや然ば歌とてもたゞ学びうる
かたきことばにもあらず歌ハたゞよく詠みぬる

てさらく小志すゝくことさ志揃ふやうしやとおもひ侍る
哥にもよみ出しても古しからぬをこそとおもへ古哥を詠
しくるしからぬ事也いふもおろかなりあやまりなき
ところゆゑなくて心地よからぬ事也趣向ひとつにても形をふ
やはらかにつゞけなす事也此体みだりにいひ出すをあやまり
おほかたは浅きやうに聞ゆれども心地よくつよきをよくよくきく
と也事しおのづからのめでたきにもなしとおもふべきことなし
まことにゆかしき事と業にてあつきものなりのこる詠
ことば続きもきよくかけるこそよけれ殊にこの事也
出来ゆへ哥をきゝ詠ぐ人ありやさしかるべし

こゝろ詠みなる事也此続きなどおもひ出て詠じ出して
集とて書くものに有事しるふようなるか又古めかし
妙なる詠じたるものゝ心地とも言ふべき見えて我ながら詠みかゝ
こと続きぬるれ古人のまことにすこしよき句と業しこそみる一
事也又まゐらせ見るに哥をきゝやうにその難の見
ことなりなきなまこと思ひてもきこのその詠をとゞむ
見えぬる事也是はかゝる古きさまに物をいふやうなる心地やうに
おなじゆゑ趣し人の哥を其心よく詠じたるゝことはよき
くさぐさの事しされども業にて詠のあらはれたる
事にもいと心地よき事也此事さりとて先年亡父卿に

なの道は事とも中侍し清有とふ家の是非いふ所
らむとせむ為にまかりしかはそれ道とはよみてよ花
へ為まにて海々の法孫の家の道理を見え老まつるや
やさおほせられ遠つまもふ思ひも為に代せられ法令の義
理をもまれ代してハ代ゆをかり細まへき為世よま
給らゆる黒白はやうなる是非をとさまへ給らへし
御申したりしかハさてハ人る給しさまける為し其の
道理のやうふ家とは取捨せもたしふあらまされさよれハ
たゝ道理の有無をそ給ゆ為るれなまやむ御ことあるひ
見家とようて田又ふりなんとるせて其給給為のつと

申給ひとハ其細家を乗めらと思ひ侍りたくひなくし
見やうき道ハ理をとをくさ代はこと為ことみなの好くく
哥乃基旅とも為て申せる九条十郎おとくなりんとくてい
上く
春たつ日といふ事にや三者好みの心いひとてけさハ人為に
哥のくと源右代給ての朝霞に消ゆく道行船とそ思ふ
是為くくまくく道く為れ哥アりたりつ也く道とも
却きし詠義也とあり玉河てたつ代たりの中く
春来ぬと人ハいへとも鶯はなきぬかきりハあらしとそ思ふ
まくく道く為なりともあるもなくくれなりしさ婦りともなく

無しうなうる物こそ恋なく侍りへとさまつ紙ちかうハこ此ちから
もて侍るとかし中はるかに下く
世中はうつり改りてかは文字もかはれるや文字
見るまでも仙洞御ゟし古今序に田文の英のうへまて
やまと歌のうたにしとかしかうへきなる八
續山家のまゝてうたてゆく年経ぬる身ハ花やしめると
思ひあて京しとこ紙ハ新房の帰て済らし人ハちぎるや
ちまたの下にたてまつまゝて侍ぬるハきさまれにちまとて
まし此歌ハよろこそまて侍るへし抜譜など此折く
しもくまてさかて後まて読えさせることなり此歌

侍るとくし紙ぬえなのふめし恋おもふれとよろこまて
に此歌にはさも見えさんをぬやうに讃歌し折ふく
とよみなのし侍恋かもつ又いろくと物といくし
こひたちはるか歌ををあてこまかなき此わかそこ紙
なるゆへくしと恋つこふかとるハ紙しをまへて
此恋し物をかはさくやうさらかさえのゝ興と風情
此かさいかさかたへともそなかひらあるかいふかしおもひ
侍くとう此うことゝそえちるかなるへし巻葉をとく
おくいふ無まてとちう侍あまてとおもふく此事とも
こ飛こまやりはここうそえてなうのよしはおこいかくちるゑ

たゝむかしの発句一句の中にも序歌のやうにて
おもむきにて句をとゝのへぬるもあるを
このころ東山殿の御時なる泉河内殿なとの心はしめ
当世ハ宗祇になる所をよくしゆくゑ心なくおもひ捨
なといふ句をもてあそひなかるへし近代の心ハ宗ハ句を
まよひなきのくもりし寄合おとれ中にはさる事も
あり句をえらひハいさゝか心をも上手のまゝに見えさま
かくさまの句にはあらす好む句也

一 聯歌世あふ句の事
花ありし句ハうし船にハさしとゝむる橋をも波も

句柄やらのたくひのあるへき也なるへし惣の具足
もたせ紀ハ是録しまくハよくさもおもちおちらと紀あり
伝たもちの句にも記あり数寄のもとし句ある八
王の紀なるへく句をとへ名のく事ハよくすむすれ句柄
能しこゝろこここ読入句をの秀句寄とそこる
しさ物よそ伝なる也よ世なきこ宗長なと録しこさも
伝の事にあるやうにもさこ如く有へし

一 文字なかありたる事
文字の要なるなと若紀たるて伝まさてもくるし
如きし本句にてさしなくたくさ心く句くみ

入て文字をあまりたる事ハことさらに心得へし いかにも
あまりてハかなふましくあまりたるをこそよくきけ
ぬ類ひハ幾文字を制のかきりにあらす
年号なとハよみくせハきかぬなからハあまりたるを先として詞ハ相尽たる
おなしことを在明の月なと有明なとゝ吹おろす山下風のをと
此頃ことをいふ事ハ漢字なとハよくきゝある斎文(?)ハ字なとあまりあり
へあるにもあてゝよろしくかなふへきにこそあるへきなれ
さ海のこはきに秋風かなれは文字数の池水事候へし
一かさね発句之事
きんもなきとかなき孫句もさらにいくあまた重なりと

是皆おなしやうなる山も紅葉せさらん秋ハ来ぬまし
いかなるやいかなるの浦のいかにて忍ふ人をも今一たひと
かくとたにえやハ伊吹のさしも草さしもしらしなもゆる思ひハ
あまりたるハ何しらぬ孫もなき詠に付ん助のとおもひて読へき
ハ努力くあるへからす 何事もよくきこえてかならす然るあ
をへていはれもおなしやうなる事なきをこれあまりなし
をくへりしことよきと覚えて心得るにみちを棲まさやう
にこころへし 例の事文出来かたく人にいさせたる
さハ然て斟酌あるへし 此の家の言葉にも不の
詞を好むよし人にさかしき事なれは是をも

ゑつりしきは詞よみてのいましめなり
よの路くことなる人のあまねきならくさとさりくさはせ
かゝる文よりも堂のみゆるはしく侍るはかゝく守
つまさく外にみえ級はしるへし

建保三年八月廿八日記之畢
遺老藤原朝臣定家 在判

以彼本于時寶治元年十月廿九日於京極宿所
書寫之
藤原朝臣為家 在判

文永六年二月七日以自筆本相傳畢
藤原朝臣為氏 在判

永仁三年七月六日以自筆本相傳畢
藤原朝臣為實 在判

三五記　鷺末

経信卿の云和歌ハ隠遁の源として菩提をもとむる要道なりと此言誠なるかなやいつれの道の道もよくさとりてもとまとハされハ達其如実知其理に絶なる凡しとやいはむゆめの今世学といふ三十一字を定むるハ如来ハ三十二相にかたとりて如来三十二相と之ともいふ離之ハ三十一相なり無見頂相ハ更にあらハれす仏と説にあらハれたる相好にかたとりて三十一字とするあるへし又されの句と合するハ是地水火風空の五輪にかたとるなりしとまん事に地輪の句に病あ

るハ足の病と云ハ氷輪の句に病あるハ拔の病と云
火輪の句に病あるハ胸の病と云ふ風輪の句に病
あるハ額の病と云空輪の句に病あれハ頂の病と
云ふなり凡そ一字一字に歌の詞姿ハ是又大宗師の作なり
それ此三十一字の詞の中にふかきところハ此心と因說の實義
の理とよへし然ハ歌一首を一佛と建立する
とおもへし乃至十首百首とよめらむハ十佛百佛を
供養せん功德とうへしとそ古賢も申されける和歌
上人此云歌ハ是禪定の修行なりとて以てけるとも
心をも一所に制せましかハいかてかよまれぬなるへし

散乱の心なからも事足にまへからさるか亡父卿曰
道と申事ありしたくひたるもある附ありて人の
必生死のことわりを知りまつハ是又祖云彼に
讃に出離の要道なれは学ふへきなり多くの心をと語
る後世の事も清の心に住吉の神も社に参籠せし
一筋に祈申されけるにある夜の夢に年の九十にも
餘りたる人とおほしきか若宮の常代の錦の帽子に
白掛をかけて御殿の御戸をおしひらきて汝か年老
なく夜しわかりとてハ身をそふくめる事なりとたれか孫にも
かふとも是はさうなく出離一大事のことをも語れとそ

まことにそれハ彼老翁か忍ひて努々他の邪道となるへき
かゝる乱歌とよみて往生すへしと申ものも世の中
おほくの歌とあつらへたるまことに識るに足らぬ事
きこえたまふされと一旦の心と争ひ給ふのことに候らしと
当来於方法にあらはるゝもしひとたきためし肝心にて
彦源もこれしき義にて物狂しく候ふ所後ハ修羅道
道にあらんと作候ひしも思ひとるにや又六義と云ふ
にあそこん候へし長歌ハ人道にあて短歌とハ地獄
道に候て旋頭歌とハ修羅道に候ひて混本歌とハ餓
鬼道にあて誹諧とて畜生道にあて廻文歌とて

天道にあつへしと申され先拙者も申あへるを尤とへハ
の事に候次にかたことを候へし或人の長歌短歌
によりてく不審し候しかけにもとて尤なる事ハ知れて
卅一字の歌とハ長歌と名附かるゝなく讃のへる歌
とハ短歌と申こと同しうちて苦しまし八識に紫蜜
いそれあつても但聴て卅一字の歌と短歌と申家の候る
事にん文ハおかしなき私の推儀にて候へし不便
の事にて卅一字を長歌と申さし短ハ五七五七々
とあるへきを忍にけるゆへに長歌と申へし短
歌ハまへくの歌仕氷さ備さるたまへにもあ七々と

はしめとしてさらに七ことはゝ名のみ絶ぬるを以て句数
おほくはしめ連ぬる故に雑歌とは申へし是ハ肝要の儀也
と申されさて六儀の事次第かくのことし申侍し是
人のあまた稱しきたる事なれハとかく申すにおよハす
是又其しなしあるらんハ詩家なる如く依違なき也
六儀根本ハ毛詩より事おこりて作文の肝要にて
天子たる也されハとこそよいひける六儀と申ハ風賦比興
雅頌の六なり
第一風歌
此風とハそへ歌といふなるへし　但風にとりて二種あり

一ニハ一天の風をさる事の由来文選とかくかくして
あり諷あるへし　則難波津之歌これ也之　二にハ云風を
由緒文題とも稱しも其詞によみなしてその歌の類
なり　小野春風を延喜の御代にはつかへて年久しかの
しはさまたれる事ありて我か頌の中小野のは
のかきふる勢居まいりし時その御かと禁中にてこゝろみ
玉ふ女房ありと出て御そのうち彼所へ行てたつぬ
さめしめすとも何にかあるて居る何のなるかある時女
申すかくてさるもの侍りとハ何とやおもひ給て其
名ハ春風といふ事にならて申し出すとおもひたち云風

乃ふとなり
九重の花匂ひし桜花をもてハ梅さくらにうつらぬを字
さて春風めされ人参内仕まつる時歌仕りし仰有けるに
日の光薮しわかねハいそのかみふりにし里に花も咲けり
光も風の歌なり但云風雅ハあまねく其道風の詠なるへし
咲花もくちはのうへ此花藪にもこえて出る花は風にあまり多く成
尚道ハ云風の歌なり田邑天皇といふまさしく位につかせ給ひし
の東宮の御時にあそびしく二年あまりかくれたまひ
へ日たりて後まいりて遷にて江侯して位につき給ひける
しとえへ奉りや歌なりお猶云風とハ心ある者を

をさまれとも猶によせ合て其気ありてためしなる
風の歌は鐘もさらへ云ふやいかなるにも其にあまる其
事なりとはいへんにそてあらぬ猶と云べきよせてよりそへ
よむと風の歌とも申されハ文選云風光浮草際と
いへる心に風にのみなり草木にあまりて其気有
るなるへし其道理をも知て風光とも申也
第二賦歌
かそへ歌といふへし
咲花に思ひつく身のあちきなさ身にいたつきのいるもしらずして
志賀の家の集には八洲歌ハさくらにかくしたる歌也と

ミゆる物に云織歌ハ歌人の本意之秀人大旨なる心
へと一篇にこめもして偏執なきを秀人といふ悉し
歌の心も一篇にこもる心なくよくぞえらん八織の躰とや
へきにや設さし花の歌も一揃に心をわきまへよしといへとさ
れとも一篇に於りひはなく身は花あらきにか他とよもる心の
さらに一切わかしろかたへさ心得に於てある之和歌の是
とされわかも宇演滅か中に秀人とされと数寄人とも
者ハ一切のよのに一篇に心をとらめもして揺さき
数寄人といふも心得ありへてもされハ花を咲もわかしいつ
ちるも又知らしろかるへしのし月ハ数ろもへるも面白く心

なき道にあま行く境なしうて一篇にあまり属せさる織歌と中
へきにや大輔家云
消もせて標とゐらん諸まれも立ハ吹くとし秋の夜の月
此歌ハ六儀をたてん時ハ織歌のきと討こたいハ妄執歌と
てにてをへし又わらせるましれ物すか行やらむ葉末
朝臣歌云
まれといふにちりてしも面影なくハ行とも桜にも心ゆたさまほ
見も大輔か家にわかし其の心とおもひしても有道か歌に
ちりぬともいそよ桜ハ風さしくれもきせに行か人へさ
此歌ハとめても九夕れと合家のなかにハ行あされハそのよまて

歯家ハ論すへし 此頌ハ織成之名業よりおこるとしよ法から
と織といふことといへる文ありの類よ織あるへし
ことてよまあるとまて人ハつかふ比賛言とといふ也

毛詩云 賦有無常之公云々

第三比歌

なすらへ歌といふ事也 文たくらへてことを讃へたる也
此四儀ある也 一には西殿の比 二には行殿の比 三には衣儀
其比四には織殿の比なり 其織殿の比とハ文を殿の比を
申なるへし 第二第四ハ似物の比なり 西殿の比と申ハ一事を
この事によそへて詠すれはいふへき也 歌云

逢みんと祈しよのかなさはいつとかれさ身せよ神のちかひを
今ハ此歌をも思わる所をによむる歌之一つと成と
逢んと祈しかと其験の二たひをへし 此二たひの心とハ神
ちかひはふかきせて叶へきとされハあふことを祈ける神のちかひある
へし 又楽あらしてあふ事きはめて あふ事ハなきにしあれとも法
人とも神のちかひなるへしとまて思ひけるも此二篇の心をとそ
神の依ひよまかせをしあまり是によあるなり逢と忘るるの二
の文ともいはて我おもふか如く事成とあんといひ是ハ西殿の
比といへし 行殿の比ハ文偏殿の比ならとやたまつ
けふのことを尋てもおもふ時なをことやとまる花の陰かハ

此歌初五の詞に叶へしたるもくるしからすそ蒼初句にもなり
なんとしたる名所所の別もたしかならぬ事なとやらさる歌あ
連ハ初五の詞にて必しも蒼春にかきるへからす一切の詞に
落合候て歌やうにて有へし其とハ初五の詞にて侍へし偏説
の詞にハ暮春なとつゝけ候て必の加ゆるにつけて文をも
事なきこゝろあるへしといふなりけん歌ハ偏題とあるへし縁の字も
とこにしかるとなるやうに侍れハ是初五も偏説も大方なる事なり
なるへし云候の詞にハ詞と候もの二つ候と候とするとき
をも以て第一

君はらさらまし此の露をそなたいかにしてたゝ清やかなれ

此歌に霜といふ字もあり二の儀あり其ハ字にも又霜の字にも
成侍へし但かやうにハ大方連歌にもやかてはの字にはた
やすからぬ哉といふも無用の事也と申す
ハさしたる修行の歌題にとりてといふとはあるも霜につきて
成侍ハ題たる霜につきて成侍る之文様は乃字
霜に結をそハ事の字なるへきこゝろ毎にまかせ毎の字なるへき
に消やうるらんといふハ人に摩をハかまはしにて
成候そなるへし霜にまかせて霜のところやかすらんと成侍へき
事やこの尺八古今連てもいかにとやらん云成候の云候の
時の事

梓弓とハ春雨ハ常の如あるといへるにて若菜はさもん
秘せることハ花なるためにこそれ故への外よりも色まさる彩
いとはるゝよさひハ武隠林ころも彩さ身といふ事也
俊蔭の比と申ハ月の歌をえらるゝかきるにて歌とこそ花と
おもへるハ雲と云類ハ只俊蔭の比と申へしいまた八月歌
とこそさへて歌と云と也ハ水ならぬ遠からぬ月歌のさと
よる色歌よ似る俊あ遠ハ儀體の比と申なり云
俊とるを清濁の月歌ハさまにさそぬ歌たあるも
ちる滿ふ花のよそめハ菩提山ありにさそく岸の白雲
かならにとよそあるとて申しとこそや

第四異躰

たとへ哥と申ハ此哥ハたとへ俊頼卿云と古今の如
し但おもむき事なり是ハ興あるへし
我恋ハよむとも尽しあらしを海の濱の真砂ハよみつくすとも
此歌を君か代ハとの常体のさま也今是たとへとも申なりさや
らんされとも古今集の中に我恋と続きハ当家ハその
まゝにて侍へし異体二あり短云異体興二句の短云異
と云ハ今の我恋ハの哥是也但又ある人斗にて異なるも
まつ異なるやうにて短云もなき哥体ありそれらを皆よふ
しく短云異体にたとへたるや短云斗あるハ短云異体短云の方に

おきつ海つ又奥斗あり人家やと殊に奥なる奥の井に浮さめて六條の井に
八雲興の頌にはしへきにやさはれとたゝ雲斗にて奥を絶家
より愛ハ汝か身にきぬ汝の石を人にかして森かくて海は
此家に海くて奥ある所を得すして奥斗にて雲にもなき絶
らこ侍りき
さくらのさかさ木葉ハ秋にも同しかたちのつきにて紅葉の二ヶ所も
雲ハなくてひとつの色ハ紅葉の木枯奥ある化身ハ花奥共
頌花前道ハ節気の花奥なる雑秋の井の奥にあるへき
事や花奥と申ハ四時の折花に随て奥ある事とおもひし
ろくのひかるも花奥と申へし　又興といふ事に重て雲奥を

奥宴との二の字ある也今の節奥ハ興宴の奥也但前道
四時の折花奥也時節に随てこそ奥宴と読あるにや
されとも花ハ秋の紅葉道ハ埋木に紅葉まて秋とさらせ秋を
紅葉はなれハ松の下葉まてもりみちするなといふ枯
の類なるへし
埋木の花の秋とやみるらん紅日かくれ道の谷のきまり紀
又辟興の頌云
大海と硯の水にまかしれもかきやかきてん我おもひをとハ
此頌と今古にかはれとも同しと侍のさてしとみ申にも
さる秘

第五雅歌

たゝこと哥といへるハ物ゝ事にたとへなともせすしてよろつの事を
只一すちにおもふまゝをいひのへたるを雅といふ二ありて一
にハ言雅二にハ意雅也言雅といふハ言葉にあらハして
そのまゝまことにたゝしくよめる也

備へたる世のさかりハいつはりなき世の中のまつりことのつとめを
心あるをも歌によめる今更にたゝ偏にいふ事也我ハこのまゝ
意雅といふハ心ハたゝしうしてまことをすなほにする事なく詞ハみたりかハ
に治定なる物をしも讃なりけれたゝむかといふ或人の
哥とハ雅にハあらて直とあるとそはの雅の内の詠と心得へし

まことにいふ心の上やかしなき物ゝ御ことけさへ御心
此詠ハ心をあらはしてたゝしくいひひとつの心をいふ事をかたのことく見るへき
やの字後のらん此字ハ疑ひのあり見たる心ハあらハへき哥也

第六頌歌

いはひ哥といふハあまねく告神明之頌に文讃頌の二の字を
いふ哥ありていふ哥と申も讃美の心あまねくとしてあらはしくいふと
さし給ひし也めでたき代を言と讃頌の字と申へきにいふ也
只いつまでも神明に告る心ありてと頌の字を申にいふなり
故毛詩序云義盛徳景容以成生業而告神明と云
また毛ハ六義の中此頌をいふ事其大なり日本紀には三頌

とも いふ心なるへき歟
何ならん光ハあかしといふ心ニて君かまもるらん世をてらして給ふ
又有儀云赤玉ならん光といへる柳 社頭也今ハ亡父卿雅世
らの連歌也 社殿をといへる文字 告神明となりぬへし 詩に
も告神道のあら御頭といへる ニいへるとて是より
あらたなる頭をもいふへきならんとなりぬる所照
云者の頭ハ心告神明也あるといへる事なるハ社殿ハ也
いふハ大内をさして いふなるへし 大裏ハ是神殿也それハ
なを大宮とも又宮内ともいふ也 守護天照大神ま
論とハなる内侍所の御事なるへし され神なる也

是たりむかしハここのへとハ内裏をここのへといふ宮
といてもむかしよりいへる事ハ也 さて紀萬葉とハ多儀有日本紀の稿本
種明神とよむさらぬ萬葉の神とよまれたる也 又秘道大事
行殿神 其秘術の分あらわさむやうなるへとて何の役
神仏の法物を禄本業にして漂く也 社殿とハ延喜
の御門をいふなれは来りて是ハ内裏をといふ事
内裏を八禄本にて作也 三の宮とハ三の宮とも
なる三宮ハ七才の七ハ多儀あり されハおなし心なるへしといふ也
ともハ此心ハもいはむとハ七代の御法ハへきなる延喜御
いさ七との御門と申すにや 其次ハ七人の賢人と

集をも政をも為さず給ひしとされハ七々の竹に絶学と
いふ事あり一人あれとも二人ある時ハ七人までも永遠し事ハ
多儀なる事その由来を来たる道ハ那なる者にハいくらとも
へだてありとしたハ賢人ハ代にますます道ある事ハあるに
文に黄河千年一度澄賢人千歳一出とみえたりけれは
稀なる人なるにや七人まてそ作りし所詮多儀なる事を定
まへるにかく名付事といへるそハ七世といひ徳の数をあ
らはしてハ七徳といふ事にや七の字にハ満とよふ訓あり又
いふなり次に先年にいへる六義の浴に詠出しては
さらにいへし其頭とハ其の卅一字の語ならび絶字といふハ

此も詠をも為すなる五七五七五と浮かぶ稀なる詠をなすへし
出きたる反と旋頭歌といふハ六句にまさるる詠なり初
瀬川ふる河の辺の二本ある杉年をへて又もあ
ひみむ二本ある杉
うちわたすをちかた人にもの申すわれその其処に白く咲ける
ハなにの花ぞも
是なとも旋頭歌なり混本歌といふハ下の句の七字
前句にてあるなり
朝かほの夕かけまたす散りやすき花の世そかし
右達らかへて必ず成へし誹諧歌といふハ狂言綺類

あるは一いろはおほてふかやうに読たる類あるへし可
山吹の花さきたるをゆかしやたつねきつるとはかなくみえて
いくたひも迴をはしめたる時あるて此回長歌を詠ならひよふ
是まて公頌へし、迴文歌といふ事
むかし葉に葉の名はらしと蔵しは名をよしもおほくに咲る也
まなしいとよりは文字との歌にも侍めれ迴文歌に二の
次第あるも今の歌の様にたとの歌に咲ゆる哥は定
大事なる文さうはうちゆへして読よと此歌を
ていひなくして別に歌の公次第のよふにとへあり迴文歌を
中すの順逆に二首の歌をよむへし次沓冠歌と

何にても十字をは歌の五句の上下に置てよみくたる也あまたせ
是沓冠折句とあらしと云十字折句をよめる歌
あふ坂もはては往来の関もゐす尋てとひこはきなはかへさし
又折句と申ハ五句の頭ことに五文字あるを折と云也
よみたるなるへし又隠題と申ハその物の名を隠してよむ事
を詞にてハあらて読入たる也畢しく古歌を
詠ませたるへし古今にハ物名と申あるを是之又云歌有
遇序題曲流の五の習あるを此五を五句に分ちあてて
よむへし但しよむに種々のまなひ有といへとも
此遇序題曲流の五をハ此を古の貴之実作にて

叁節して詠の称いはゆるといへるハもはら口に発す
一首の詠をさす人の歌仙其ハよみかたを歌ふる
あかねさすといふも地書柳の我ゆくすへよるとはよまれ（人丸・赤人・蝉丸・黒主）
歌の称如此よての急序題曲流ハ詠をよまんせ
先るかゆへし序ハ海ししくよまんとせらるの濫觴
題ハ詠の題之題彼よての句をもまさる事ハあるへし
曲ハ節さし地事いと異ある節らにいふなるへし流ハ其の
末川らちも多く入あるやうにゆくりしと讀ゆへきなり
先歌よハ童のかふしと歌の文字ハよかるへ地物と
節る次よ題對といふ事次第よ每句詞縁あり

あるを渡合とハいふ也是も縁の詞をいふ也能かくせ
中にも必ずなりてもその道ある事にとはるへくもとも作ハ少なく
まなふへしいふまさやうに一首より掲に對をあくまてよめハ
ちりみてあれハあるそくへし上句くさけれハ
下の句ハのふやうに下答くさけれハ上の句のかふ
節のかよひとハたかうにたよ意にハくさけれ
歌ハそや一称にて上句下句くさきもののかなかふけさ
かゝらん詠ハ又上下の句もち一具によみあらんそよ
詠しかるへき次に頭首尾といふ事をしかれる文字
とさをつのせいしらの何ぞを首尾合せる詠と申也

次縁乃字をいふ事後の句のおもてに始の五文字の
あくる故中番し同じことハ縁字とも申さるゝ也
首尾にかゝるとも終得しとめる義さへ絶えしめの
五文字ゟ縁ゟつの七文字にかゝるべし字の縁
字中とハ初の五文字次の七句打ちかへ何にても一句
あるまじき故中番し次に親句といふこと初の五文字よ
終の七五七々の句迄一首にて合せとくるまでに皆合故
いふなり即ち歌のゝ詠吟なり次疎句といふ事始の
五文字に終の七五七々の句のかゝりなく一句二句を
あくらむとも申番し或人の云親句に疎句まれなり

疎句にハよし他家まゝしとも申もの酒あるまじく次家の
點の事ハさまでにあらず知られてしくあるべし門八代傳
など他に譲るとも也長點一寸二分三分に平點ハ七八分乃至
一寸あるべし次にてるのく詠にハ用ゆまじし他難依て傳
有らん當家にハ今それまで知る事也されども我説
をもつて也他家の説をも他家へ語ハ當家に道
をたゝ他所にて何事ハかくすべし書とも何べし或人の
云歌道ハ義傷の頭なるまじへら他かて通一やうなき
後日共に無常故よそなき中…人丸ハ彼帝
の御師徳あるく南庭の月にむかひてもるに秋を

さりながら進て小冠者の中より二人取出しきこえあらし
法の親の忠くなる法をなみ給ふ源氏の厨も
さしあたりてきたりては事新しからはけめてもおもへる哀
儒の頭なるを申あらはされは泗頭の公なれは申さは
仏門をは毎年たとへなりめて進給へる帝とは紫式部を
毎に仰せとへ申しとや周のしと何のしの事ともあるは
仏の教へをのたまへりやうにおもほし侍けるを
首尾無事の弓の者は思えて生老病死の四魔
といふ物のことを此毎に思ひ事しなることよみて侍る進
ことよそへるは実は生老病死の四魔なりて侍る事にも同

此法の中にはいかに進のみ事とも申しおほしめさるるや
若人丸は五代の帝に仕へたる人とや又帝の御事は
いつれの御代の頭に讃給ふ法の将軍天皇是
法事とかや申しめさる同人丸の官位何と申ける
とや若成抄云登金紫黄緑之廓刷蓮府槐門
これといへり金紫黄緑は法師後の庫名之蓮府
槐門は時の官位の唐名なりとて此人は妙音菩
の化現とかや又申よし柿本は僧正是は故金吾
日亡父卿若古今なとよまれし時大事とて申され
たりしは頭にたりし此頭の頭をは古今集

海路の旅に入る人の為の文字の称にも名備とは称なし
これを彼海路の旅と申も我海路に出る事は
皆これも人の事なれは浮指にて何の為と申ハ
人をも送りなとして漕出て行人無名をとゝまるを
見る事の二番を如く右よろぬへきいうさ国にも海路の
旅なとハ乃かへりさる頭ただの是ハ至上大事なり
されはこそ知るを知らすしされハ人にかへる事なれ
此等をも海路の旅と知るへく浮秘の方為の人丸と
申人別にたし平城天皇と人丸と申まかりあれ
あかく人の秘説とく申なる相伝を是吾不念の事也

称名さやしくもかへらけれ申けるし文海さしくも一首の
其月日化生して出来の人数不とも申事なる紀記録
にも伊か九平城天皇と人丸と申事たるハ右と当
世の好士一両人儀をもちつる事之北條金吾も頭
なりかた文卿も吾城出されしうりにもけなく
共為家をも海路の旅と申事ハ平城天皇の御記れ
当世年号ハ出しつかつし何は近の年たりける申
此たる共ちりしよう名も再共あるまてうてきうも三年の後
海人にも是をも見ハかれハ府の人一人二家て伊の為る祭
あやしきにて申達さとあそて随何へ奏しかれハや[illegible]南殿御覧と

国立公文書館
National Archives of Japan

哥道にて本国の事なと沙汰あらは此人を以て書あらはす此人の身に
存しかたき事共かきけるなと云事も人丸と見と逢
しるて彼これと受し侍るのかくて帝此法師とこそ侍と
そなたを世に捨人と成り彼宣命の旨を聞し出て其の皆
高くして聞し此歌道者也といふ々沙汰寵愛ありて叡
慮ありつゝと旅されさる処三年と申けるに出家と云
て御らんといふまゝと申請られ八法のあさりれ出世の事ひとく
いそ此集ととめてまのうちよせ送り給ひての浦
に隠岐にあらんとて志のひつて人丸めしくたしまして彼
度々のと送るを給ひて其国にて其身に此事とそしと出家の給

こそ此を書とさうるまゝて陰にてく人丸と二人清水を見あ
りて三年此法名残おわりしめしりととれと比歳にあかり
にて世に侍ひけるの人丸もとより本道に人ありけ八悲にて
此家の後よしりのまひとをや人丸の家集に満さしく海路
の旅と出合ひやさて悲しと聞をしそ故にやまるとたまひ
とて此家にて侍る哥道此家に見て秘記の事也又此哥道家の
事もさまへに申ためりとまゝ道とも別に家の人ととて
侍るまで人丸の著名なるよしと申家く候侍るや
うゝむ当家には勿論人丸家人は各別の人と称し侍
て侍の事人あるとて能もいうへぬ事なと正説の候に

いはんとて無尽の事ともを今案してかとこそや
是ほとの魔障なりける世にて不浅く不便の事也
たゝもちゐしとみゆる儀をも大切なる伝受文字ま
秘儀八己儀にて侍るへし人丸赤人の御若[illegible]事をもとも
如何ゝ先賢ゟ事も同□の事とも無申有る所そん
古今序に人丸は赤人か上にたゝん事かたく赤人ハ人丸か下にたゝと
むかしなりとあり柿本ことなる由とも二代此字かし合
あるへきにや貴之もそれをおもふへて無人か上に人丸
なれとハ此絶たるあるへし されハ当家秘伝人丸ハかり
まさなるとゆかんとて中無なる事とてハさもなる事

柿本道にとも唯信一子の秘文之おもふくハ無沙法
なる人のゆるさ侍らん例の事なれともいかてかそ
不可為外見者也宜賢とく
建保五年九月五日記之
遺老藤原朝臣定 在判
以彼本于時寶治元年十一月六日於京極宿所
書写畢
藤原朝臣為家 在判
文永六年十二月七日彼自筆本相傳之
藤原朝臣為氏 在判

永仁二年七月六日被自筆本相傳畢

菅原朝臣尚実 在判

應永三十四年正月廿六日自或貴方相傳畢

左近中將源具世

長祿四年庚辰南呂上旬比依有多年宿願之子細

信州若潜参詣次於伊那郡山田郷数日逗留

時節山田堯次郎清原真人盛政依有殊懇志被

二帖抄物令相傳者也凡彼本者先年於燃下終

夜以紙筆令書雖穢数校奥細且者為備未来愆

境且為残老眼餘編也所令校上下秘本但慌

哲禁方努之不可出函底縦雖為一子家督末代

為道無器用者雖抛而下不可相傳而已

長祿四年九月十二日

俗名东参衛具世

桑門光曉 判

日本政府図書

右三五記以 本校合畢

群書類従巻第三百二

巻三百二

五十八了

国立公文書館
National Archives of Japan